

あんな嫁さん欲しくない



人間とは弱いものなのか、それとも強いものなのか、もちろん両面あるのだが、考えの基盤をどちらでとらえるかでその人の言動にかなりの違いが出る。私は人間とは弱いものだという基盤でものを考える。建築の形にもそれは出てくる。

最近の建築を見ると、人間の尊厳とか、命の尊厳とかがもう建築を作る上で何の意味も持たないものになっている気がする。建築が近代合理主義とか伝統とかいう骨格を捨ててから、いわゆるポストモダンとかで悲愴的にうかれ始めてから、変てこなカニヤタコのような建築が出現し始めた。イカエビ建築、なまこ建築等何でも出てきた（かつてライトもサザエ建築、サボテン建築を作っていた）。そのうち、くらげ建築や海藻建築なども出てくるに違いない。

そうやってきたのは、人間が節度とか道徳とかという骨格を捨てて、自由と、不安と、強迫観念的な個性を得てうろつき始めてからのことだ。

実在の証しを得るためには、とつてい不要

なものであふれ返った海を渡らねばならなくなつた。若い建築家たちは果敢である。羅針盤も持たずに出航している。人間を強いものにとらえているのだろう。カニタコ建築の人間の実在とは無縁の空間の中で、人間は存在をかけた戦いを強いられる。

建売りは人間を嘲笑しているし、現代建築は人間に戦いをいどんでいるし、雨露くらいはしのであげるがあとには知らんとでも言いたげな乾いたカラカラ建築だったり、なぜこうも人間と建築の仲は悪いのだろうか。建築を嫁さんに例えたら、あんな嫁さんは絶対にもらわない。いくら世紀末だといっても、普段と同じ流れの一点に過ぎないはずである。

命もファッションになり、幸福の概念も決められない時代にあつても、無から有形のものを作り出す意志は、命への意欲であるはずである。つまり建築の意欲である。建築の建設にとどまらず、命の建設まで深めたいと思う。

丸山邸について

建築を人間の近くへ引き戻したい。ポストは水道管の塩ビ管を加工したもの、ドアの把手は普通の水道ホースで作ったもの、その他、カギや室内のドアの把手、アルミ板の曲げ底、最上階のスライド式天窓等、あらゆる所に私の手作りのものがある。高価な特注品への反



発である。内装には自然の材料をふんだんに使った。予算がなくても出来ることだ。最上階は墨田川の花火を見るためのもの。その日は友人達で、この空間が熱気を帯びる。壁面にいくつもある小さな出窓は開閉出来る。オリジナルをたくさんもり込んだ家だ。全ての部品をオリジナルで作るのが私のひとつの夢だ。敷地は八・五坪。

写真上 小さな敷地に寄り添うように住宅が並ぶ下町。地上四階のこの住宅は八・五坪の土地に建つ。ポリカーボネイト製の曲窓がファサードを特徴づけている。写真下 玄関ドアの把手は、ビニールホースを利用した建築家のオリジナル品。



写真上、四階サンルームに造られたベンチは、下町風情を感じさせる緑色風デザインのデザイン。写真中、ポリカーボネイト製の曲窓の開閉部に使われた部品は、ヨットで使用されるもの。ここにも建築家のアイデアが生きている。写真下、三階居間、内装は構造用合板、間仕切りや窓枠は、2×4材を使用し低予算で仕上げている。

うんのけんぞう 略歴／一九四九年 東京都生まれ。一九七四年東京理科大学卒業。設計事務所 施工会社 大工、ヨット造り等を経て一九八〇年 海建築家工房設立。丸山邸で一九八七年度東京建築士会住宅建築賞受賞。